

モールス符号による通信

JJ1SXA 池

今から5年前の、1999年2月1日で海上保安庁の通信は、新しい遭難・安全通信システムの GMDSS に移行され、日本でのモールス電信による業務通信の取り扱いは完全に無くなったようですが、通信技術の進歩によって、デジタル技術による確実な通信手段が確立されたためで当然の結果ですね。

無線電信(モールス符号による通信)は、デジタル信号の1種、且つ、人間の五感(あるいは、六感?)で解読できる唯一のデジタル通信です。

機械によるデジタル信号処理と違って、無線電信は、QRN、QRM、QSB といった不安定要素が加わりますので、人間の五感を駆使しなければいけない世界です、業務通信からモールス電信が無くなっても、人間の五感を駆使しなければ解読できない、その難しさが、趣味であるアマチュア無線の世界では、健在に生き続けることになるのでしょうか?

モールス符号は、画家であるアメリカ人サミュエル・モールスにより考案されたのが、1832年頃で、その後、モールスはこの符号に改良を加え、現在使われているものとほぼ同様のアメリカン・モールスを1844年に発表したようです。

当時、電信の符号はモールス符号の他にもあったようですが、モールスは新聞社の印字ケースにあった活字の本数から、文字の使用頻度を割り出し、そして一番短い符号から順番に使用頻度の高い文字を割り当てていきましたので、迅速な送受信ができることになり、のちに世界標準として使われるようになったようです。

和文モールスは、明治の初期に、欧文モールスを基に考えられたそうですが、アルファベットは26文字、「イロハ」は48文字、足りない分を作りましたが、基本的には「アルファベットの間」に新しい符号を付け足しただけですから、使用頻度の高い文字が短い符号とはなっていません、しかし、日本人は、トン・ツーが「A」であり、「イ」であるという高度な技術というか、難度の高い解読技術を身に付けて、それを駆使しているのは、すばらしいことだと思います。

アマチュア無線技師の試験も、かつては、この和文電信が難関で、1 アマを断念せざるを得なかった人が数多くいましたが、和文電信の試験が無くなったばかりで無く、近い将来には欧文電信も試験から除かれるようです。

そんな中、モールスの新符号が誕生しました、メールアドレスに使う「@」アットマークの符号ですが、最近良く使うメールアドレスの送信にアットマークをどう打つかと悩んでいた局が多かったようですが、これで悩み解消です。

こんな符号は良く覚えていなくても、メールアドレスを受信中に何だかわからない符号が出てきたら、あっ、アットマークだと思えば良いですね。